放送大学研究年報　第36号（2018）25-31頁
Journal of The Open University of Japan, No. 36（2018）pp. 25-31

Guatemalaにおけるマヤ先住民の空間表現へのアプローチ
～Ixil地方を中心に～

佐　藤　仁　美[1)]

Approach to the space expression of Mayan indigenous people in Guatemala
～Focusing on the Ixil district mainly～

Hitomi SATOH

要　旨

本研究は、織と色彩コラージュを通して、Guatemala Ixil地方におけるマヤ先住民の空間表現へのアプローチを試みたものである。筆者は、2017年に現地調査を行い、本学研究年報35号にて概要を記した。本研究は、その各論にあたる。研究対象は、Nebaj、Acul、San Juan Cotzalの３地域である。

Ixil地方は、山間部の閉鎖的な土地で、虐殺の歴史があり、独特な織が残された。織には、その土地に伝わる民間伝承が織り込まれている。色彩コラージュ表現において、Nebajの表現には、織のモチーフは表れず、立体的で、自由度が高かった。Aculでは、織のモチーフが表れた。San Juan Cotzalでは、視野や空間の広がりと表現に動きが感じられた。

地域の特色は、色彩コラージュにおいて、織のモチーフと空間表現に影響を与える傾向があった。

ABSTRACT

This study tried to approach the space expression of Mayan indigenous people of the Ixil district in Guatemala through textile and color collage. The author conducted her fieldwork in the area in 2017 and wrote its summary to the Journal of The Open University of Japan, No. 35. This study is one of its detailed expositions focusing on 3 areas ; i.e., Acul, Nebaj, and San Juan Cotzal.

The Ixil district is an unsociable area in the mountains with a history of massacre, which left some unique textile patterns. In each of the three areas, folklore passed down from generation to generation was incorporated in the textile. In Nebaj, the motif of the textile was not expressed in color collage expression, but instead three-dimensional expressions were found, and the degree of freedom of expression was high. In Acul, the motif of the textile was expressed in color collage. In San Juan Cotzal, an expanse of the space expression was recognized, and movement was felt in expression.

The areal characteristic tended to influence the motif of textile and spatial representation in the color collage.

1. はじめに

グアテマラは、全土で108,889km^2、日本の北海道と四国を合わせた広さよりやや大きい程度の土地の中に、約1,658万人（2016年世銀調査）が住み、その内のマヤ系先住民は46％ほどになる（2011年国立統計院推計）。800万人弱の先住民は、約23のマヤ言語に分かれ、近隣でも共通言語を持たない地域もあり、身に着けている民族衣装により、互いの出身・年齢等を見分けていた。民族衣装は、互いのアイデンティティ確認手段の一つと位置づけられている。グアテマラ・マヤ先住民は、「相互に『目に見えるシグナル』を送り合うことによって集団間の境界を構築し」ている（小泉、1994）。桜井（2006）は、先住民の女性の身に着ける衣装の柄や織は「目に見える言語」として各村落

[1)] 放送大学准教授（「心理と教育」コース）

の出身を表し、民族衣装を纏うことは『沈黙の言語』として文化的レジスタンスを表現していると説く。つまり、民族衣装は、形と色を通して、異なる文化を知り、それぞれの個を守りながら、交流・共存していくために、欠かせない存在となっている。

小泉（1996）は、「マヤの場合については、衣装が『何かについて何かを言っているsaying something of something』（Ricoeur 1970、Geertz 1973）という捉え方により見えてくるものがある。自分たちの『習わしだから』着る、自分が『着たいから』着るという答えが結局何を意味するかについては、衣装を共同体とエスニシティの文脈に置けば見え方が変わる。言うまでもなく、衣装が人のアイデンティティについて、いつでも何かを『言う』ということではない。一方では、衣装がそれを着ける人のアイデンティティについての全面的な表明であり、アイデンティティ以外についてのメッセージがあまり見あたらないこともある。他方では、集団的アイデンティティについてのメッセージはほとんど見あたらないような種類の衣装もある。ただ、マヤの衣装は、華やかであることに加え、人の属する共同体や人の属するエスニック集団について、確かに何かを言っている。人が何を着るか、人が自己の可視性にどのように手を加えるかは、単に抽象的な美の問題ではなく、あるいはそれに加えて、重い社会学的問題でもあり得るということである」と説き、「共同体成員全員が、老いも若きも、寝ても起きても、完全に単一のユニフォームを『肌身』離さない、という事実は、そうしたユニフォーム、いわば『第二の肌』、ないしは剥がすことを（意識的にせよ）忘れられた仮面のようなものであることを示している」（小泉、1994）。

グアテマラのカクチケル・マヤ出身であるOtzoy（1992）は、マヤ先住民の衣装とアイデンティティとの密接な関わりを指摘し、「マヤ」にとっての衣装の重要性を強調している。それによると、マヤの衣装の重要性は政治的であり、歴史的闘争や政治的抵抗のプロセスの中に位置づけられるとのことである。マヤ先住民が衣装を着けるということは、「他の手段を選ぶことができない状況下」での文化的抵抗としての政治的意味を持ち、「土地と織物を守ろうとしてきた」あらわれであり、「織物について語るのは、土地について語るのと同じだ」ということである。

これら、様々な背景を背負いながら、内外両面からのアイデンティティ表明でもある民族衣装の役割としての「目に見える言語」「沈黙の言語」（桜井、2006）、「何かについて何かを言っているsaying something of something」（Ricoeur 1970、Geertz 1973）は、筆者の中で、高階（1967）の説く、「もともと人間は自から空間を占めながら、空間のなかにおいて生きている。空間というのは、いわば人間にとっての外部の世界の象徴であり、空間をいかに捉えたかということは、外界をいかに受けとめたかということにほかならない。そして、芸術空間というのは、その最も端的な表現なのである」ということばに結びついていった。

筆者は、2010～2017年の間、4回にわたるグアテマラ訪問において、人々の生活に触れるなか、マヤ先住民の民族衣装に込められた思いに魅了された。民族衣装自体、祝祭時の特別な衣装は殊更に、先住民が普段着として日常身につけているものも、異文化の我々にとっては、ひとつの芸術作品として捉えられる面もある。

2017年、マヤ先住民の暮らす4県9地域を訪問する機会が得られ、各地独特の織の取材と、先住民に色彩コラージュを作成してもらい、グアテマラのマヤ先住民の世界を色と形からアプローチする試みを行った。調査地域内訳は、都市化発展中ではあるが民族衣装を日常的に身につけた織り手の存在するサカテペケス県San Antonio Aguas Calientes、火山と湖など自然豊かなアティトラン湖畔のソロラ県Santiago Atitlan、San Juan la laguna、San Antonio Palopoの3地域、山間部に位置するコバン地方のアルタ・ベラパス県San Juan de Chamelco、Tacticの2地域、キチェ県Ixil地方のAcul、Nebaj、San Juan Cotzalの3地域、計9地域である。放送大学研究年報第35号では、色彩コラージュに用いられた色彩イメージについて、調査地域全体を概観していったが、共通性がありながらも、地域ごとの作品特徴が認められた。本稿では、その内のIxil地方に焦点を当て、色彩コラージュとそのイメージの語りと織、風土などを照合して、考察を深めることとする。

2. 織と色彩コラージュの関係

志村（2004）は、「着ることは“いのち”をまとうこと」であり、「織るということは、架空の空間に物を作らなければ出来」ず「布を織りつつ絵をかいてゆくようなもの」、「経と緯が交差することによって、かたちになる…ものが成就するって人生も全てそう」「先天的なものと現在の自分の気持ちとがぱっとここで出会った時に、織物が一つ出来ていく。経糸はもって生まれたもの、緯糸はその日、その日の生きるあかしで」「このぐらい出来た時に全体のイメージがないと、これと全体のイメージがばらばらだったら、織れない」と語る。グアテマラの織り手も、「織模様は頭にあって、書き起こされた図案などは存在しない」、「織はじめは人生の始まり、その先はずっと続いていくもの（歴史）」（Lydia、2016）と語っており、織は国境を越えて、込められた思いを含め、人生との関わりが強い。

織り手は、織り始めの始点はあるが、その先は永遠（終わりはない）というが、この始点は、この世への誕生を意味し、日々の流れを織り込んでいく。そのある時点までを身に纏うのであるが、衣装そのものは、代々受け継がれ、後世につないでいる。つまり、人生を纏い続けているということである。古と現在では、織の様相も変化しているが、基本は維持されながら

も、個人のアイデンティティが映し出される。時に、外からの新たな事物が持ち込まれ、それを織りに表そうとする織り手も少なくない。

一方、本調査に用いた「色彩コラージュ」も、異文化アプローチに、欠かせない要素を持ち合わせている手段と位置づけられることもできる。

まず、コラージュというもの自体が、「異質なもの同士の組み合わせ」であることがあげられる。池田（1987）は『コラージュ論』のなかで、エルンスト（Max Ernst、1891-1976）のコラージュを取り上げて「かけ離れた現実の偶然的な出会い」と説き、コラージュ作品とは「一種のいかにも個人的メモワール」と表している。心理療法におけるコラージュ表現においても、クライエントの表現には、さまざまな個人的歴史・思いが込められ、作品と言葉をもってセラピストに語りかけてくる。コラージュ作品自体、作者の時のある一点における集約された表現であり、個々人の歴史を包括している。個人の流れの中でも、独自の様式を通底しながらも、さまざまな刺激との関係から、徐々に変化をたどり、いつしか自己変容を迎える。

マヤの民族衣装の織も、祖母から孫へ、母から子へと受け継がれ、マヤの歴史が受け継がれていくが、その色や形も緩やかに変化の途をたどってきている。織も、表現の場は異なりながらも、コラージュ表現にこめられるものと同等の「一種のいかにも個人的メモワール」が宿っているものである。

グアテマラの死者の日には、各地で先祖と交信するための大凧上げが繰り広げられてきた（**図１**）。直径10mにもなる凧は、１か月ほどかけて、一族総出で竹を使って骨組みづくりをし、色とりどりの紙を貼り合せて、先祖にまつわる事物やその歴史、家族の思い出、自分たちの土地の習わしを凧一面に作り上げる。マヤの人々にとって、色とりどりの紙を構成しての造形は、根付いていることから、集団制作と個人制作の差はあれ、雑誌を用いたコラージュよりは、色彩コラージュの方が、違和感なく、マヤの人々に作成してもらえるものと推測した。

織り手は、グアテマラの方位にまつわる基本５色（赤・黒・黄・白・緑/青）を織り込み、ウィピール等を身につけるということは、宇宙を身につける意識を持つといわれている（Hecht、2003）。これより、色彩コラージュに使用する色彩は、教育用折り紙27色より５色を選んで作成してもらうことに定めた。また、ウィピールは、自然を取り入れたものであり、人と結びつくにより、調和が生まれることを意味している（Andres、2017）。これは、マヤ調和の思想（実松、2016）に通じていよう。コラージュの「異質なもの同士の組み合わせ」も、一種の調和の試みと言えないだろうか。

図１　Sumpango　死者の日の大凧上げ（2016.11.1）

3. 風土と織空間

調査に訪れることができなかったが、アグアカタン地方の綾織は、水と肥沃のシンボルとされる（Canby、1993）。一般的に、ウィピールの首回りの刺繍が、土地によって展開されているが、たとえば、湖水地域の織り手に尋ねると、「首を通す穴は湖部分で、襟ぐりに施された模様には、湖岸の自然を表している」とこたえる。山間部の織り手に尋ねると、「首穴は太陽で、周りに星や月を表している」などの声が聴かれる。

「グァテマラの気候は、四季による変化はないが、雨季と乾季の２つ区別される。５・６月ごろから11月ごろまでが雨季で、一日に一回は雷がひびき、激しい雨が降る。植物にとっては恵みの雨だが、山道などは川となって激流をなす。マヤの人達は、天象・気象の恩恵と危険を肌で感じ、それを織物の文様に現わしている。つまり、太陽、月、稲妻、雨、虹、波、渦などが文様化あるいはシンボル化されている」（赤池、1998）。

赤池（1998）によると、古代マヤからの世界観が「口伝」により根強く受け継がれており、その伝えられた神話や伝承文様がウィピールに表され、植物文様・動物文様にシンボル化されたり、色彩を通して展開されることが多いとのことである。まさに、「織物について語るのは、 土地について語るのと同じ」（Otzoy、1992）ことが見て取れる。

4. Ixil地方の特徴

キチェ県（西：Departamento de Quiche）に属すIxil地方は、グアテマラで人口の多い県のひとつで、大方はマヤの後裔でしめられる。先住民のほとんどがキチェ語を話すが、Nebaj、Chajul、San juan CotzualではIxil語を話す。中央高地やクチュマタネス山地、チュアクス山地、南西部の火山地帯の山地が総面積の79％、北部に広がる熱帯低地が21％をしめる。生活は、換金作物のトウモロコシのほか、ジャガイモ・モモ・リンゴ・コーヒーなども栽培している。宗教は、カトリック教徒とされているが、実際には現地に伝わる神々を信仰している。

古典期においては、「ゴム・羽毛・毛皮：コーパル（熱帯産樹脂）と高原の塩、黒曜石・黄鉄鉱との交易

の仲介の役割を果たすことで繁栄していた。しかし、後古典期にマヤの雨林文化が衰退すると、それにつれてIxilは孤立した野生生活に陥っていった」(Canby、1992)。グアテマラ内戦時代の1982年～1983年にかけて、グアテマラの軍部がIxil族を虐殺して大きな人的被害が出た。そのため、Ixil地方の先住民は、閉鎖的で、顔の表情等も薄いと言われている。

筆者が訪れた2016年（『色と形を探究する'17』ロケ）・2017年（調査）においては、現地コーディネータと通訳者の存在に助けられ、調査に協力下さった方々には、出会いの時から、はみかみながらも笑顔が見られ、交流が進むうちに徐々にほぐれ、より豊かな表情を見ることができた。

4-1. Nebaj

「緑深い山々に囲まれた素朴にして落ち着いた山村」（児嶋、1984）と表現されるNebajは、標高1900～2000mほどの、古より独自の文化を持つ地域と言われている。マヤ十字信仰が通底し、村の東西南北に位置する聖なる場所にマヤの十字が据えられ、日々、祭られている。Nebajは、35年にわたるグアテマラ内戦期に、グアテマラ軍によって数多くの先住民が虐待された歴史があり、1979年以降、Nebaj人口の約30％が殺害されたか逃亡したと言われている。この内戦により、最大20万人の先住民が虐殺され、その内戦の終結を迎えたのは1996年である。多くのNebaj住民が軍による虐待経験を持ち、ほぼすべての住民が、虐待・虐殺された親族や友人を持っている。この内戦で犠牲になった者を弔う十字が、Santa Maria de Nebaj教会の中に、Nebajの布を配したキリスト磔刑像とともに祭られている（**図 2**）。

Nebajは、Ixil地方の中で最も産業が発達しており、車の交通量も多く（**図 3**）、この地方で唯一の信号機が設置されている地域である。調査を行った2017年時点では、ほんの一部ではあるが、小学生年齢の子どもたちに、スペイン語のみならず、英語の普及が始まっている様子が見られた。

また、この地方に伝わる物語を縫取織りで織り込んだ美しい織物も特徴である。古の織物は、密度も低く、物語の登場人物がはっきりと見て取れる形であったが、時代とともに複雑化し、密度も高くなり、宝物探しのように描かれた具象物を探さなくては見分けられないほどの織物と変化していき、幾何学模様も増えた。

Casa de arteの研究者Carla（2014/2017）の説明によると「昔は貧しく、糸も染も自給自足で身の回りのものを用いていたために、色数が少なく、限られた色で表現していたために、地の色に登場人物もはっきりと見て取れるものであったが、時代とともに、安価な化学繊維や、化学染料が導入され、色数も増え、密度も高まった」とのことである。

織に表されたものがたり）　いくつかの織に、その地方の民間伝承に基づく図像が織物に展開されている。Ixil族の織物には、具象化した人物・動物・事物がすき間なく織り込まれることが多い。物語を縫取り織りで表現することが少なくなく、大地の守護神バラム（虎）や、コーツと呼ばれる大鳥の伝説などが織り込まれることが多い。

Nebajの織もそのひとつで、言い伝えが、ウィピル・スーテ・ヘアバンド等に、鳥と人物と馬が同サイズで、緯糸で織り出されている（**表 1**）。以下、織り手から聞かれた言い伝えである。若干ニュアンスが異なっている。

「ある美しい少女が青年と恋に落ちたが、父親に許されなかった。少女は青年が部屋に飛んでこられるように青年を鳥に変身させるが、父親に見破られ、２人は馬に乗って逃げた」

「ある少年が、ロバや鳥を連れて井戸に水汲みに来る少女を手伝い、その後、二人は結ばれ、子が生まれ、平和な生活を送る」

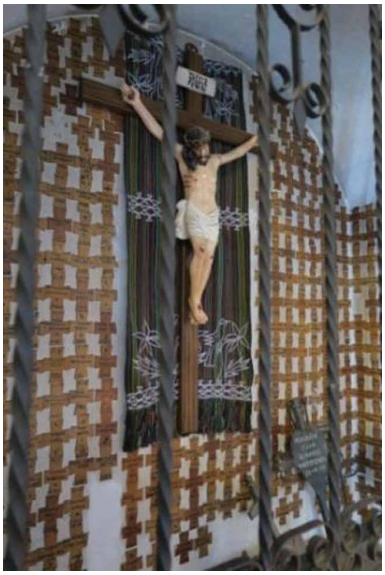

図 2　Santa Maria de Nebaj教会内の内戦犠牲者の十字架
キリスト磔刑像周囲に100を超える数。

図 3　Nebaj　コンクリート建築も見られ、バイクなどの交通量も多い

表１　土地・織・色彩コラージュ

	Nebaj	Acul	San Juan Cotzal
土地の様子			
織	 鳥・人物・馬などが織り込まれている	 鳥・人物・馬などが織り込まれている	 鳥・花・虹など自然物が織り込まれている
色彩コラージュ 女性	 A　B	 F　G　H	 K　L　M　N
色彩コラージュ 男性	 C　D　E	 I　J	 O　P　Q

色彩コラージュ）　AculやSan Juan Cotzalでは見られない立体表現があり、枠から大きくはみ出していく特徴がある（表１）。織の窮屈とまで感じられる隙間ない詰め込みに比べて、コラージュ表現は、水平・垂直方向へと枠を飛び出し、空間の広がりが見られる。男女ともに顔（A・C・E）、男性に家（D）を作るように、ひとつのアイテム表現もあれば、家・ロケット・顔を組み合わせた立体構成（C）や、デコパージュで色を段々に重ねた地球の抽象表現（B）があり、バラエティに富んでいた。また、台紙枠の外側に向けての花弁（A）、地球覆う緑（B）、前髪（E）のように、ゆるい枠づけの傾向も見られた。

色彩の用い方については、顔パーツに金銀（A・E）、白（C）が使用され、黒は用いられない。黒は「闇」など負のイメージを持つ民族でもあるためと推測できるが、詳細は聞き取りができなかった。

4-2. Acul

文化的にNebajに準ずるが、さらに山奥に入った場所に位置する。

ウィピールは、Nebajの文化と同様に、物語に登場する人物・事物が縫取織で織り込まれ、幾何学模様も多い。赤・黒・白の経糸に、色とりどりの緯糸でモチーフを織り込んでいく特徴がある（表１）。現地の先住民の説明によると、Nebajでは織り手が減少し、Aculの織手に依頼することが多くなった、とのことである。

色彩コラージュ）　他の地域にないAculの特徴は、男女ともに、つくりたい形状をまず台紙にペンなどで描き、その絵に合わせてちぎり絵をするように折り紙を埋めていく工程がみられた（表１）。特に男性２名（I･J）は、形に添って外枠から中央に向けて棒状（線状）にした折り紙を貼っていた。それに比べ女性は、描かれた線の中に、細かく切った色紙を埋めていくような貼り方をしていた（G・H）。他の地域に比べて、枠づけが強固な印象である。

表現された作品内容も、女性は馬（F）・鳥（G・H）・木（G）といった近景表現、男性は三角形（I）・四角（J）と幾何学模様であり、織り模様の再現、または共通性が高かった。総じて、Aculの色彩コラージュ作品には、ウィピールと共通する具象模様が表現されていた。

色彩は、赤（赤茶）・緑（黄緑）を中心に用いられ、台紙の白と、ポイントに用いられている黒をあわせ、この地の織の基本色に共通していた。

4-3. San Juan Cotzal

標高1600～1800mのクチュマタネス山系に位置する村である。

ウィピールは、「全体に青みがかったIxil独特の文様が縫取織ですきまなく織り込まれ」、ウィピール首回りには、「チェーンステッチで、織り込み模様と見まがうほどの刺繍がほどこされている」特徴がある（児嶋、1998）。

2017年調査において、女性共同体の主催者であるPedroの説明によると、「首回りの色とりどりの》》》》《《《《模様は、風の流れを意味している。鳥のモチーフは、飛べること。織り込まれた花は、ランの花であり、風を送り込む・穴をあける意味がある。連続する×××模様は、先祖からのつながりを意味する織模様で、肩部分に多い。（着ると鎖骨あたりに位置する）》》》》《《《《模様は、色とりどりの組合せで虹を表現している。San Juan Cotzalでは、虹は５色」とのことだった。San Juan Cotzalの織に込められた意味には、他の地域にない動きを感じる。「風の流れ・風を送り込むランの花・穴をあける」が、それを象徴している。風や窓は、採光・換気・内外のつながりとの関連性がある（浜本、2011）。この地域の自然、先祖とのつながりをベースに、他とのつながりを受け入れている様子が垣間見られた（表１）。

色彩コラージュ） Acul、Nebajと比べて、空間の広がりと表現に動きが感じられ、この地の織に込められた風などに象徴される動きに通ずる（表１）。男性に、四角（O）・三角（P）と幾何学表現が見られたが、Aculとは異なり、内をぎっしり埋めることなく、空間が感じられる。女性（L・M）が家を表現しているが、周りに情景も加わり、Nebajの家表現よりも、視野の広さ、あるいは、空間の広がりが感じられる。また、人物表現（N）は全身像になり、やはりNebajでは顔だけといった身体部分表現に比べ、視野や空間の広さを裏付けていよう。

色彩の使用については、パステル調に近い明るめの色彩が多く用いられ、表１に表示した織の色彩と似通っていた。家の窓（M）に銀色が用いられ、見方によっては人の目にも見え、Nebajの顔パーツの色に共通している。しかし、全身像（N）では、目は黒を使用していた。

5. 織と色彩コラージュの関係から見た３地域の特徴

男性は、AculとSan Juan Cotzalにおいて、三角と四角などの抽象像が主流に対し、Nebajでは、人の顔や家、事物といった具象表現が主流であった。また、Nebajでは、立体表現が見られ、AculとSan Juan Cotzalの平面表現と様相を異とした。一方、女性は、３地域共に、具象表現が多い。特に、Aculの表現は、ウィピールに織り込まれる馬や鳥が、同形状にてコラージュに表現されており、表現の連続性として、織と人々のつながりがダイレクトに感じられた。

具象表現では、Nebajの男性１名、San Juan Cotzalの女性２名が、家を作っている。３作品共に、窓とドアが作られ、外界とのつながりを予感させる。一方、Nebajの家は、それのみに対し、San Juan Cotzalの家表現には周りに情景も加わり、視野と空間に違いがあった。

AculとNebajでは、織においては同属であるが、文化的に外界に開かれつつあるNebajは、織とコラージュの共通アイテムはほとんど見られないことに対し、いまだ閉鎖的なAculでは織のアイテムがそのままコラージュに反映され、表現の違いがみられた。一般的にコラージュには、表現者の世界観・価値観等が表現されやすいことから、AculとNebajのコラージュ表現に、両地域の文化差が反映されたものと推測される。

San Juan Cotzalは、AculとNebajと、文化圏的にも若干異なる面もあり、織り模様の一つひとつのアイテムの象徴も、その表現に違いが見られる。AculとNebajは、織りに込められた物語性が強く、表現アイテム自体の登場人物・事物としての具体的存在性が強いことに対し、San Juan Cotzalの織り模様の一つひとつに象徴性が強く、具体的形をとりながらも、抽象的表現の意味合いの強さを感じる。この違いが、色彩コラージュの表現にも反映されている様である。また、AculとNebajでは、織では隙間なく織り込み、色彩コラージュでは枠づけして空間を貼り込める特徴などに表れるように、閉鎖的な土地の特徴に重なり、San Juan Cotzalでは、織に込められた風などに代表される動きと、色彩コラージュでは動きを感じさせ、広々と自由に空間構成したりと、地域的にも徐々に外部からの新たなものを受け容れようとしている動きにも通じ、織と色彩コラージュに関係性が見られ、共に地域性を垣間見ることが出来た。

色彩においては、３地域ともに赤系と緑系の使用が多く、身体部に赤系、周辺部に緑系が使われることから、マヤの基本色「赤」の血≒身体、「緑」の大地・自然が身近にあることがコラージュにおいても表現されることが見られた。織とコラージュの色彩については、マヤの根底にある基本色に共通性があるものの、そこにコラージュ作者の好みも加わり、織りに使用されないような色が加わって、基本色＋自分好みによりキャラクターが表れているようである。

色彩コラージュ表現には、形状と色とに、実際のアイテムとの若干のずれがある場合もある。織で糸を使って描きたいものを表現する際も、糸に出せる色も限りがあることから、もっとも近い色を使うことがあるが、色彩コラージュも同様と考えられる。しかし、そればかりではなく、港（2012）が指摘するように「『見たままの色』とは、個人の記憶に大きく依存するものであり、また社会の記憶によって変わっていくこうであろう」こと、「主観と環境要因に左右されるために、『見たままの色』や『本当の色』はひとつとはかぎらない」ことも、要因としては考慮すべきであろう。

6. おわりに

グアテマラの子どもたちは、生まれた時から日常的に、家族の身につけた物語ウィピールを目にし、メモワールの織り込まれた母や祖母が作ってくれたウィピールを身につけている。そのような環境に生きていることも、コラージュ表現の諸相に、表れているのではなかろうか。

Ixil地方には、文化的にも政治的にも、異邦人には理解することには重すぎる歴史が奥深く流れている。文字化された資料もほとんどなく、現地の人々から聞き取る他に方法はない。織ひとつをとっても、そこに込められた文化的メッセージは、とても深いものであり、むやみに触れたり、理解できたと思うことは、とてもできない。今回、研究に当たり、通訳兼コーディネータの小林グレイ愛子氏と、現地コーディネータの方々に、緻密なご配慮をいただいた。研究にご協力下さったすべての方々に、心より感謝の意を示すとともに、マヤの方々の理解と、他地域へのアプローチ研究にもつなげていきたい。

文献

Ann Hecht 原著　近藤 修 翻訳（2003） textiles from guatemala グアテマラの織（大英博物館ファブリック・コレクション―Fabric Foliosシリーズ） デザインエクスチェンジ

赤池照子（1998） 解説―衣装のできるまで―　Ⅲ五色に燦く文様と色 「五色の燦き　グァテマラ・マヤ民族衣装」 東京家政大学博物館

Andres（2017）聞き取り

Carla（2014/2017） Casa de Arte レクチャー

Geertz, Clifford（l973） “Deep Play：Notes on the Balinese Cockfight.” In the Interpretation of Cultures, Selected Essays. NewYork：BasicBooks, Inc., pp.412-53.

浜本隆志（2011）「窓」の思想史：日本とヨーロッパの建築表象論　筑摩書房

池田満寿夫（1987） コラージュ論　白水社　P58

小泉潤二（1994） 境界を分析する　―グアテマラの場合―（黒田悦子編著『民族の出会うかたち』）朝日選書

小泉潤二（1996） 現代マヤの衣装と政治：グアテマラの場合　大阪大学人間科学部紀要・22 P.319-P.340

児嶋英雄（1984） 特集・グァテマラの染織 『染織の美28』 京都書院

児嶋英雄　東京家政大学博物館編集（1998） 五色の煌き　グァテマラ・マヤ民族衣装　東京家政大学出版部

Lydia Lopez（2016） 取材・聞き取り

港　千尋　2012　芸術回帰論　イメージは世界をつなぐ　平凡社新書

Otzoy, Irma（1992） “Identidad y trqjes mayas.” Mesoamérica 23：95-112.

Pedro（2017） 聞き取り

Peter Canby 著、大窪一志 訳（1993） マヤ 神秘を開く旅　図書出版社（Peter Canby, 1992　Heart of the Sky：Travel Among the Maya Harpercollins）

Ricoeur, Paul（l970） Freud and Phyrosophy：An Essay on Interpretation. New Haven and London：Yale Ulliversity Press.

桜井三枝子（2006） グアテマラを知るための65章　エリア・スタディース　明石書店

実松克義（2016） マヤ文明：文化の根源としての時間思想と民族の歴史　現代書館

志村ふくみ　鶴見和子（2004） いのちを纏う　色・織・きものの思想　藤原書店

高階秀爾（1967） 芸術空間の系譜　鹿島出版会

（2018年11月２日受理）